おとなから見た子ども（Ⅱ）

鯨岡　峻

はじめに

前稿[註1]において我々は、一部メルロ＝ポンティのソルボンヌ講義録[註2]に触発されてではあったが、子どもを見るおとなと、見られる子どもとの関係から生じるいくつかの問題点をとりあげた。その中で、まず第一に、見る側は透明な認識主観たりえないこと、第二に、子どもは一個の閉じた認識の対象たりえないこと、したがって第三に、見られた子どもの姿というのは、見るおとなの欲望の布置を背景として浮き出た図として了解する必要があること、第四に、子どもの問題として取りあげられるものは、子ども――おとなの関係性の中から出てくるものだという点を概観し、特に自我の発達に触れながら、それを子どもの欲望とおとなの欲望の関係性の一側面として論じた。要するに、子どもをあくまでおとなとの関係の中の存在として見ていく必要を論じたわけである。

こうした問題意識は、子どもの発達研究において取りあげられる個々の事象が、そこに参与する機能の分析に還元されてしまい、事象そのもの、子どもの生きた現実の姿が総体として捉え返されていないことへの反省から出てきたものであった。今日の発達心理学は、意識的か意識的でないかは別としても、子どもを特定の能力や機能の集合体に還元し、その能力や機能がいつ出現するのか、その出現の前提条件になるものは何かを明らかにしようとしている。つまり、特定の機能の出現に先行する機能、後続する機能を明らかにしていくなかで、行動の発生的連鎖を解明し（行動発生の必然的順序性の解明）、また特定の機能発現の必要条件、前提条件として他の機能の影響を考え、一見関連性をもたないようにみえる諸機能間に機能的連関性を明らかにしようとしているのである（機能的連関性の解明）。

こうした発達心理学の動向そのものは、今日指導的立場にいる発達心理学者たちの証言をまつまでもなく、一九五〇年代までの発達研究の多くが、何歳になれば何ができるといった成長的事実の目録づくりに終始してきたことへの反省をふまえたものであった。しかし、このような動向を先の発達心理学者たちのように、単に「発達心理学の歴史的展開における必然的な一歩前進」とみてよいかどうかは大いに疑

問である。疑問とする理由の細目は次節以降で詳しく論じるが、何よりもまず指摘しておかねばならないのは、今日の発達研究の多くがその分析の網の目の細かさにもかかわらず、子どもの全体像、子どもの生きた現実の姿を捉え返していないということである。本来、分析は子どもの全体把握のための一手段としてあったはずである。ところが、その目的を彼岸におくあまり、分析することの意味が見失なわれ分析自体が自己運動して、分析とその目的との緊張関係が失なわれてしまっているようにみえる。

我々が前稿において子どもをおとなとの関係のなかでの存在としてみていこうとしたのも、こうした発達心理学の今日的動向に疑問を感じたからである。本稿ではこの疑問をさらに煮つめ、関係的存在としての子どもというパースペクティブが今日の発達心理学に対してもつラディカリズムの一端に触れてみようと思う。

一、個体発生の枠組と発達概念

《完態に向かっての定向進化》

発達とは何か、発達心理学はどういう領域を扱う学問か、そして発達心理学の目的は何か。こうした関連しあう一連の問いに答えながら、素朴記述的なそれまでの発達心理学に目的意識性を付与し、それを体系的に記述してみせたのは、ウェルナー（1940）[註3]である。今日彼の体系が真正面から取りあげられることはほとんどないが、彼の構想を支える発達観は、常識的な発達概念と結びついて多くの発達研究者の発達概念の暗黙の下地となっているようにみえる。そこでまず、少々長くなるけれども彼の発達心理学の成り立ちをとりあげ、そこに孕まれている問題点を指摘してみることにしよう。

彼は発達のイメージを胎生発生学、形態発生学に求めたといわれている。受精卵が出生直前の完成した胎児になるまでの道程、それが発達についての原基的イメージとなると考えたわけである。細胞分裂が何段階か進行しただけの胚のレベルでは、もちろん器官発生はみられず、細胞集塊は未分化で漠然とした一つのまとまりにすぎない。しかし時間の進行とともに細胞分裂がくりかえされ、その結果器官が分化し、分化した器官と器官の連絡が密になって完成した形態を備えた胎児になっていく。彼はこのような発生的変化の様相にヒントを得て、発達一般にあてはまる基本原理を構想したといわれている。すなわち、まず発達的変化一般を完成された姿に向かっての定向進化と捉え（定向進化の原理）、もともと形態発生学の用語であった分化という用語を発達的変化を記述するものとして用いて、この定向変化の内容を《未分化なものから、分化したものへ》と定式化した。そしてさらに、分化の進行とともに、分化分節した各部分が全体として階層的に統合されていくのを発達的変化のもう一つの本質的側面と考えた（階層的統合化の原理）。このようにして二つの一般発達原理が導かれると、今度は逆にそのような発達原理を満たす領域が発達心理学を構成するものとなる。こうして個体発生をその中核としながらも、系統発生、文化発生、病理発生が発達心理学を構成するものとして組み込まれ、それぞれ各特殊発達心理学として位置づけられることになった。そしてさらに、各特殊発達心理学を互いに比較考察することを通して一般発達原理が再吟味されていったのである。その際彼は、発達心理学の

扱う発生的変化は精神機能の発生的変化でなければならないと考えた。彼は自らの著書に『精神発達の比較心理学』という題を付し、各特殊発達心理学が扱う機能的に未分化な心性を互いに比較しながら、そのような未分化な原始心性を全体として記述していったのである。[註4]

さて、彼の発達心理学をふりかえってみるとき、我々の今の関心からみて次の二つの点が重要である。まず第一に、胎生発生にヒントを得たことによって、未完成なものが完成していくこと、つまり完態に向かっての定向進化を発達的変化の根源的なイメージとして取り込み、しかもそれをごく自明なものと考えたことである。第二に、個体発達を個体のもつ諸々の機能の発達と捉えたことである。第一の点についていえば、時間の進行に伴って生じる変化であっても、完態に向かっての定向進化でないものは発達の領野に含まれないことになる。最近、生涯発達心理学（life-span developmental psychology）が語られるようになってきたけれども、機能的完成までの過程をとりあげるのが個体の発達心理学だというふうに考えれば、結局は十八才〜二十才までを上限・完態としてそこに至るまでを個体の発達過程とみる結果になるだろう。実際、ビネーの精神年齢にしても、ピアジェの認知構造の発達にしても、二十才前後に完成された姿を想定しているのである。完態に至るまでの個体発生過程が「発達」という言葉を支える根源的イメージである――これは一見したところ疑問をはさむ余地がないようにみえる。しかし、議論は逆立ちしているのであって、むしろ常識的な暗黙の発達概念のなかに、発達とは「子どもがおとなになること」であり、完成された姿に到達することであり、よりよい状態に向かっての不断の前進である、というイメージがあって、それがウェルナーを代表とするほとんどの発達研究者を捉え、たとえばウェルナーの場合には、胎生発生の過程にその暗黙のイメージと同型のものを見出したということなのである。我々はここで、そのような常識的発達観が一般に間違っているというつもりはない。さしあたっては、そのような発達観のもとに捉えられるものが、子どもの生きた現実の姿の一断面にすぎないこと、そしてそれによって子どもの現実の相当部分が切り捨てられることになることを確認するにとどめ、ある時点での子どもの全体像をおとなとの関係の中で捉えていこうという我々の方針とこうした発達観とがどのように相入れないかについては、次節で詳しくみることにしよう。

個体発達を機能的発達としてみていこうという第二の点についていえば、そこには、先にも触れたように、行動の出現目録の作成に終始してきた観のあるそれまでの発達研究に対して、一つの批判的契機を見出すことができる。「四カ月の時点で対象物をじっと見ながら少し息づかいを荒くした」、「七カ月の時点でこの子は坐ったまま両手を伸ばして対象を掴みに行った」、「十カ月の時点でこの子は柱時計を指さしたが手はまだ指針の形をとるに至ってはいなかった」、「十二カ月の時点でこの子は人差指をつきだして時計を指さしながらダッダと言った」「二十四カ月の時点でこの子は『ママ、あれ見て』と言った」――発達の各時点で記録されたこのような行動項目は、そのままでは他の行動項目の中に埋もれてしまう。しかしいま、「対象指示機能」の発達という点から行動目録をながめると、ここに書き出したような行動がとりだされてくる。そして、言語的な対象指示をもってこの対象指示機能が完成するという風にみれば、そこに至るまでの行動系列が対象指

示機能の発達の様相を示すものと捉え返されることになる。つまり、特定の機能に関してその完態を想定することによって、そこに至るまでの機能的発達という観点から、言い換えれば、その機能実現の目的及び手段の分化と統合化という観点から、一見脈絡のない諸々の行動目録を整序していけるわけである。つまり、そのような機能的観点をとることによって、それまで見えなかった精神発達の構造が明らかになるわけである。このように、一つの機能的観点から一見関連があるかにみえる一連の行動が取りあげられることになるが、その連関性が真の内的連関であるかどうかが次に問われねばならない。こうして、行動の因果的連鎖（行動の出現順序性）の解明、行動の内的連関性の解明が発達心理学の課題として登場してくることになる。要するに、個体発生を個体の持つ機能の発達とみることによって、今日の発達研究につながるパースペクティブが切り開かれたということである。[註5] 機能的連関性の解明、特定の機能出現とその前提となる初期経験の解明という方向性は、発達障害に関わる諸データと結びつくことによって、臨界期、発達段階、発達課題、等々の概念をうみ出してきた。

しかしながら、この機能的な見方というのも一つの子どもの発達像の切り取り方なのだということが銘記されねばならない。どういう機能に着目するのか、その機能に関して何を完態として想定するのか。そこには研究者の（あるいはその人の常識というかたちをとって表われるその社会の）暗黙の価値観が介入してこざるをえない。ピアジェのように、形式論理操作を完態とみなし、そこに至るまでの道程を要するに発達ということだとみてしまえば、[註6] 体系の一貫性と整合性は得られることだろう。しかし、問題はそれによって子どもの生きた現実の姿が全体として捉えかえされるかということである。

それに、一旦機能的な観点から完態が措定され、そこに至るまでの行動連鎖が配列されてしまえば、前段階の行動は、後続する行動出現のための単なる一ステップ、通過点になってしまい、その行動がその時点の子どもの生活世界の中にどのような意味をもつかなど問題にならなくなることだろう。機能的観点から行動連鎖を時系列的に考えるあまり、その行動がその時点でもつ意味が捨象されるならば、その行動は機能的につながりのある過去の行動を貶め、また機能的につながりのある未来の行動によって貶められるだけのものになってしまうのである。[註7]

さらに、機能的観点から子どもの発達をみるということは、結局は今何ができ、何ができないかというように能力をみることに解消されていく。いま、ある子どもがどのような精神機能を持っているかを捉えるためには、まず何らかの課題を与え、それにその子どもがどう反応するかを見ていかねばならない。こうして、与える課題とそれへの反応パターンを時系列的に整理することによって、発達検査が考案される。そしてそのような発達検査によって測定された機能的完成度がそのまま子どもの発達の姿そのものに置き換えられていく。そのために、子どもが発達するということの問題がみな、できることできないことの問題、子どもの能力の問題へと還元されていくのである。そして子どもの発達を、機能の発達、能力の発達として見ていけば、結局子どもを閉じた能力の集合体とみることになり、しかも、その能力をおとなの働きかけや文化、社会の影響からまったく分断された子どもの属性と考えていくことになる。こうして発達の問題はそのような諸

能力の自然な展開過程ということになってしまうのである。

これまで我々はウェルナーに代表され、今日の発達研究の暗黙の下地となっている発達観を概観してきたけれども、そのような発達観の含む問題点を、子どもの生きた現実の姿において捉えかえすという我々の視点から、今少し具体的に見てみよう。

《発達観によって捨象されるもの》

時間と共に完成された姿に向かって前進すること、これを発達の原基的イメージとすることに問題は何もないようにみえる。実際、今日よりは明日がというのは我々の日常を支える願いであるし、子どもの日々の成長が完成に向う姿であるとみえるからこそ、我々は「発達」という言葉に深く思い入れをし、その言葉に美しいイメージをかさねてきたのである。しかし、このような常識的な発達観がどれほど我々の日常生活に根ざしているにせよ、それが自明なものとしてただちに発達心理学の基底に捉えられてよいということにはならない。これによって子どもの発達の全体の姿のなかから何が浮き彫りにされ、何が捨象されることになるのか、それへの反省を経由するまでは、本来このような発達観を自明なものと容認しえないはずであろう。

では何が浮き彫りにされたのか。浮き彫りにされたのは、一見ばらばらにみえる行動間の機能的連関性であり、行動の発生的連鎖であった。そして、初期経験効果、発達段階、臨界期といった諸概念である。もとより我々は、この発達観から浮き彫りにされてくるものをすべて否定的に見ようとしているわけではない。子どもの発達というものにそのような分析的な切り込みをいれていけば、ごく自然にそのような断面が切り出されてくることだろう。しかしそれが発達研究の全てであったり、唯一その方向に向かって進むことが発達心理学の進歩だと自足することはやはり許されない。

捨象されたものは何か。それは子どもの志向性、感情、葛藤、要するに子どもの心的現実であり、子どもの生きた現実の姿である。言い変えれば、機能として、能力として位置づけられないもの、完成への定向進化という様相をもたないものすべてである。子どもの発達的変化を機能的変化という軸に射映してみること自体は、それが子どもの発達的変化全体を捉えるための一つの切り込み方であることが十分わきまえられてさえおれば、決して無意味なことではないし、むしろ必要な手続きの一つであろう。しかしそれが一つの切り込み方であること、明らかにされたものが一つの断面にすぎないことが忘却されて、その断面が子どもの発達の姿全体と等置されるとき、発達心理学は不毛の地にさまよい込むことになる。つまり機能だけが浮き彫りにされ、子どもの全体像が捨象される結果になるのである。

それにしても、完態に向かっての前進という発達のイメージがなぜそれほどまでに自明だとされるのだろうか。個体発生過程には、先に触れた胎生発生と同様、未熟から完熟へのまぎれもない身体上の成長的変化がある。そして行動の出現に関しても、相当大きな個人差はありながら、概して言えば、人（ヒト）としての種に固有の出現順と出現のテンポが認められる。定頸→坐位→這行→二足歩行等々、少なくとも普通に育っていく子どもに関しては、個体差要因を越えた法則性が見出せそうである。このような成長的変化にみられる諸事実が、「完態への定向進化」という発達観を支えていることは否定できないところだろ

う。それゆえ、バウアー（1979）のテキストにみられるように、発達とは遺伝子にプログラムされ、あらかじめぼんやりと輪郭をえがかれていたものが学習や経験など環境の作用を媒介してはっきりした輪郭と方向性を与えられていくことであると考えられて、そのような後成的諸過程（epigenetic processes）のみが、発達過程であるというような見方も出てくるわけである。[註8]

身体的成熟の意味では子どもが時間とともにおとなになっていくことはいうまでもない。問題はそこに「完態に向う」という仮定があって、しかもその方向に向かうことが価値的に高いと暗黙のうちに仮定されていることである。身体的成熟という点ではそのようにみても問題はなかろう。しかし子どもの精神発達全体をながめるときに、完成された姿＝価値的に高いものへの接近というフィルターをかけるならば、見えなくなる部分がかなり出てくるのである。[註9]

子どもの発達する姿が素晴しいと見られたり、「発達」という言葉が美しい響をもつと一般に受け取られるのは、成長することが完成されたもの＝価値的に高いものへの接近であると暗に考えられているからである。たしかに成長の過程で行動能が一つ二つと増えていくのは、子ども自身にとっては大きな自信と喜びを、周囲のおとなには安心と満足を与えるものにはちがいない。けれどもそれは発達していく子どもの一面の姿であってすべてではない。実際、子どもの行動能が増し、子どもの行動の世界、観念の世界が広がって、おとなの世界に向かって接近すればするほど、そして行動の自由度がまし、精神機能の可塑性が増せば増すほど、我々人間の場合にはその分だけ多くの葛藤を抱え込み、世界への適応を難しくしていく一面をもっているのではないだろうか。フロイトのように、乳児の世界を至福の楽園とみて、それ以後を受苦と受難の日々とみるほど人生がペシミズムによって色どられるものかはともかく、一面では彼のいうとうり、子どもの発達とはおとなによって一定の鋳型にはめられ、可能性を奪われ、葛藤を増大させていく過程でもあるのではないだろうか。

このようにみてくれば、子どもが持っている機能的装備の自体的な展開、完成されたもの＝価値的に高いものへの前進といった、発達の原基的イメージはもはや自明なものでもゆるぎないものでもなくなる。そして、このような発達観をもとにこれまでの発達心理学があげてきた諸々の「成果」というのも、結局のところ実証主義のまな板の上にのるもの、測定可能なものに限局されてきたこと、とりあげられたのは子どもの全体像のわずかな断片にすぎないことがわかる。しかし、たとえ断片としてのデータであっても、それを既得の発達尺度上に位置づけることで自足せず、また機能分析の枠組の中に閉じ込めてしまわずに、そのデータを再び子どもの生きた生活の場におきなおしてその意味を読解しようとしていたならば、分析に際して捨象されていたものが再び取りあげ直され、従って子どもの全体像が再び浮かびあがってきたことだろう。そうしてみると、これまでの発達研究は、自明の発達観の上に自足していたばかりでなく、方法論的手続の一つとしてあった機能分析の枠の中に自足して、分析⇅総合の往環運動をないがしろにしてきたことのそしりを免れない。

これまで我々は、今日の発達研究の暗黙の前提として研究を方向づけている発達観を洗い直すなかで、まずもってこの発達観をもとに浮かびあがるもの、捨象されるものを明らかにしてきたが、次に、発達

段階という概念を批判的に吟味しながら、そこに含まれている問題点を考えてみることにしよう。

《発達段階という概念の問題点》

今日、『発達段階』という概念はいろいろな場でいろいろな使われ方をしている。幼稚園や保育所などでも「子どもの発達段階を考慮に入れた課題提示を考えよう」とか「発達段階に見合った保育になっていないのではないか」という発言は、いまや日常茶飯のものとなっている。「子どもの発達段階からみて集中的な課題活動としての鯉のぼり作りをいまこの時期に与えるべきである」、「子どもの発達段階からみて今日の鯉のぼり作りの活動には無理があったのではないか」。こういう発言を聞くと、保育に携わる人が自らの保育を弁護し、他者の保育を批判するための楯と矛としてこの概念を用いているのがよくわかるし、さらには、この概念がある特定の行動ができるようになる時期というふうに理解されていることもわかる。

個体発生の過程にいくつかの節目をおき「期」として区分する考え方そのものは、昔からみられた。文化的な枠組のなかで乳児期、幼児期、児童期、青年期等々の区分がごく自明なものとしてなされているのは周知の通りである。しかし、機能的発達という観点から「発達段階」という概念が導かれたのは、一方では個体発生過程を社会的慣習に従って区分するこの恣意性を越えようとしてであり、他方では、単調に増大するいわゆる発達曲線にみられるような連続的発達観の人為性を排し、機能的完成の過程に非連続点を発見していくことによってであった。[註10] ここでまず、「完態に向かっての定向進化」という発達観から「発達段階」という概念が切り出されてくるまでを跡づけてみよう。

個体発生の過程は、ある個体が他の個体になり変るわけではないという意味ではもちろん連続している。けれども、精神発達にとって重要な意味をもつ特定の機能が新たに登場してくると、それによってそれまでの諸機能の体制（構造）が崩れ、いずれその新しい機能を取り込んだかたちで新しい体制が再編成されていく。つまり機能的完成への道程に非連続な面が見出せるわけである。たとえば言葉が子どもの中に定着するようになると、それまで行動的に把握されていた個々の事柄が、総じて言葉を経由して捉えられるようになり、しかも概念的にまとめられ整理されるようになる。つまり、それまでの認知の働きの体制に再体制化が生じる。この場合、この概念化の働きをそれ以前の機能に還元しきることはできない。従って、後続の体制を先行する体制に還元・解消することができないので、そこに非連続な亀裂が認められることになる。このような機能的な体制（構造）の節目を我々は発達段階と呼んできたのである。

もっともその節目をどのように取るかは、研究者によって異っている。ウェルナーであれば、言語による媒介を重視して、大きく知覚水準と概念水準に区分しようとする。彼の場合、この区分は単に与えられた課題に応じる際の機能的装備の問題としてばかりでなく、世界の捉え方の構造的変化、ゴールトシュタイン流に言えば、世界に対する具体的な態度から抽象的な態度への移行とみられている。ピアジェの場合には、問題を認知の発達に限局したうえで、課題解決場面で子どもがもちだす手段としてのシェマの発生的連鎖をとりだし、そこに操

作性（ＩＮＲＣ操作）があるかないかによって大きな段階区分を考えている（前操作期――操作期）。

このように、機能的体制、手段的シェマの構造に非連続な面（創発性）を認めるところに発達段階という概念が成立するわけだが、こうした手順を敷延していけば、より細かな段階画定も不可能ではない。精神発達にとって重要な行動の出現は、創発的（emergent）＝非連続的な面をもっている。それゆえ、その行動の出現をもって、「――ができる段階」というように段階画定を行なうことが可能なわけである。ピアジェは前操作段階（感覚運動的知能の段階）を手段シェマの質によって六つのステップに区分したし、田中はさらにそれを細かく区分してみせている。[註11] こうして、どのように段階区分を画定するのか、措定された非連続にみえるその段階間にどのような機能的連関性をうちたてるのか――これが発達心理学の課題となってきたのである。このような段階画定に至る手順をふりかえってみると、いずれにしても「完態に向かっての定向進化」という枠組が強く働いているのに気付く。まず一群の行動や機能を「完態に向かっての定向進化」という枠組のもとに配列してみなければ、機能的非連続点は見出せないわけである。そして機能的観点からみた「発達段階」という概念は、結局今何ができ、何ができないかという能力の点から子どもを見ていくような方向づけを与える結果をまねく。つまり、当初、機能的非連続点として考えられた「発達段階」という概念は、その成り立ちの意味を失なって、子どもがどういう能力的装備をもっているかを見定めるための一つの指標になっていくのである。このようにして、「発達段階」という概念はつまるところビネーの「精神年齢」という概念とほぼ同義のものになり、現に教育現場や保育現場では、この節の冒頭で述べたようなかたちでこれを振り回す結果になっている。

さて、先にも少し触れたが、最初の一年間の乳児期では、行動レパートリーはかなり限局されており、個体差変動は多少あっても、その行動出現の順序および出現時期は比較的一定している。それゆえ、特定の行動の創発的出現をもって段階画定を行うのは容易である。この場合には、いかにも蕾が花開くように、その子どもが個体として持っている能力が自然に展開されてくるようにみえる。このような乳児の行動発達の様相は、比較行動学の知見と重ね合わされて、主要には成熟要因に支配されたものと考えられる傾向にある。つまり、人（ヒト）という種に固有の行動出現順と出現時期が遺伝子にプログラムされていて、時間の進行（成熟の進行）と共に、そのプログラムにスイッチが入れられていくというわけである。[註12] 子どもの発達がすべてこういうものなら、発達段階はまさしくその個体の中に埋め込まれたもの、その個体の内部に「存在する」ものであろう。ところが、子どもが成長し周囲の世界に参入していくと、様相は変ってくる。親の、おとなたちの、社会からの働きかけが増えていくのに応じて環境差も増大し、子どもの経験の差はしだいに大きくなっていく。異質な文化を比較してみればわかるように、もはやそこには、乳児期にみられるような共通項は容易には見出しえない。たしかに同一文化内の子ども同志のあいだでは、一定の年齢段階にかなり共通したパターンで行動が出現する。そのために、発達の段階画定が容易にできるようにみえ、遺伝子にプログラムされていたものが発現してきたとみえる場合があるが、それは社会的慣習としてのおとなの働きかけが、異文化と比較すれば信じ

られないほど類似しているためなのである。

乳児期以後にみられる「おとなの側からの働きかけ」に照明をあてて考えれば、特定の行動の出現は、もはやもっぱら時間プログラムに従った遺伝子の発現の結果とみなすわけにはいかなくなる。したがって発達段階というのも、もはや子どもに内属するものとは考えがたくなる。それは、狭くは子どもとおとなの相互の働きかけあいが収斂したものとして、広くはその子をとりまく文化的社会的慣習によって媒介されたものとして措定されるものだということになる。このように乳児段階を越えたところでは、カプセルに入れられた一匹の子猫の個体発生過程を外側から観察し、そこに「発達段階」を見出すのと同じ意味において、この概念を語りえない。この概念はすでに個体発生の枠を越えた問題を抱え込むのである。

我々はいまや「発達段階」という概念を前に一つの選択をせまられているようにみえる。つまり、この概念をあくまで機能的非連続点という意味あいで理解し、従って、結局はその個体の遺伝子プログラムの問題とみていくのか、それとも、子どもの能力の成長、おとな―子どもの働きかけあい、社会―文化的慣習などによって、多元的にしかも入りくんだかたちで決定をうけたものとみていくのかという選択である。しかし、これは決して選択の問題ではない。機能的非連続点としての発達段階は、あくまで機能分析的な見方によって切り出された一つの断面にすぎないのである。我々はこれまで課題状況とのかかわりのなかでもっぱら個体のもつ機能に着目してきた。それを可能にしたのは、おとなの働きかけを捨象し、子どもの志向性を捨象し、子どもの生きる生活世界を捨象したからである。たとえば我々は、子どもの認知機能の発達を解明しようとして、子どもの生きた現実の世界から、認知にかかわる特定機能を抽出し、特定の課題を与えたときに、その機能がどのようなかたちをとってあらわれるかをみようとする。そして課題状況（S）を分析し、反応のタイプ（R）を分析して、そのSとRの関係をその課題に対するその子の能力とみなすのである。このように機能的分析は、常に子どもの世界をテスト・バッテリー的状況に還元してしまう。要するに、できるか―できないかという観点から子どもをみていくのである。しかし、一般に行動は分析による単一の機能的意味に還元されえない。その行動を子どもの生活の場に投げかえしてみれば、それはもっと拡がりのある意味を持っていることがわかる。実際、最初の誕生日以降に現われてくる行動のなかで、親の働きかけや社会的圧力をまったく媒介することなく、遺伝子にプログラムされていたものがそれ自体として発現してくるような行動があるだろうか。もちろんこういったからといって、誕生以後の行動がすべて純粋に学習行動だといっているわけではない。ただ、一見成熟因子によって完全に規定されているようにみえる行動でも、それは子どもの現実生活の中に登場してくるものである以上、その行動の出現は常におとなからの働きかけや、社会的な方向づけとのかかわりをもっているということである。

たとえば排泄の問題を考えてみよう。これを個体の機能という点からみれば、括約筋の随意的コントロールの問題に還元されてしまう。しかし、そのコントロールができる―できないは、決して単一機能の問題ではない。つまり、一定の時間を経過すれば、遺伝子プログラムにスイッチが入ってひとりでにこのコントロールができるようになる

わけではない。それはすべての親が経験する事実である。一切おとなの介入なしに、ほおっておいてそのコントロールができたという例はまずないだろう。そこには、親の側にもそろそろ躾を始める頃かなと思わせる社会的通念、賞讃や叱責というかたちでの親からの働きかけ、「させられる」から「自らする」への子どもの志向性の変化、親の動きかけを暗黙のうちに方向づけている親の諸々の願望、等々の要因が含まれ、しかもそれらが密接にからみあっているのである。そして、できる―できないは機能上の意味に限局されずに、親の側、子どもの側にさまざまな感情的反響をひきおこし、それがまた子どもの世界全体にはねかえっていく。親子関係の問題点がその躾の場に凝縮したかたちで顔を出してくるわけである。[註13]

したがって、括約筋のコントロール機能の問題であるかにみえる排泄の問題は、実際には、生理的側面、心理的側面、その子の生きる社会文化的側面によって多元的決定をうけているといわなければならない。言いかえれば、それは「出るか―出ないか」の閉じた問題ではなく、生理的な面に、心理的な面に、また社会文化的な面に開かれた問題だといえる。分析的あるいは近視眼的にみれば、これは機能の問題のようにみえるけれども、これを子どもの生活世界に投げ返してみれば、いま述べたようなパースペクティブが開けてくるのである。

実際、ウェルナーの知覚水準と概念水準、ピアジェの前操作―操作という段階にしても、結局は「世界を認識する」ことに向かって強く方向づけられた特定の文化の所産に他ならない。いわゆる「未開な」民族が知覚水準にとどまったり操作以前にとどまったりしているわけではない。彼らの文化は、我々の文化がもつような概念装置をもって世界を認識することに方向づけられていないというだけのことなのである。[註14] 彼らが彼らにとって価値あるものの観点から行動能を配列するなら、今度は我々が「低次」で「未開な」民族ということになるだろう。

そうしてみると、「発達段階」とはいったい何だろうか。それは「完態への接近」という観点から機能を配列してみたときに見出される機能的非連続点である。言い換えれば、それはある観点から構成されたものにすぎない。それは個体に埋め込まれたものではなく、おとなの働きかけや社会的慣習にむかって開かれたものである。「発達段階」があたかも個体に内属するもののようにみえるのは、子どもを生活世界から分断して能力の集合体に還元し、ある行動の意味を特定の機能に還元したからなのである。そして、そのようななかから導き出された「発達段階」は、つまるところ子どもの機能的完成度を測る目安として利用され、何ができるかという点から子どもを見るという風潮を助長し、そのことによって発達する子どもの全体像をゆがめ、生きた子どもの姿を切り捨てるのに一役買ってきたのである。

こうして我々は、「発達段階」という概念の検討を通して「完態への定向進化」という発達観、「機能分析的見方」が含む問題に照明を当て、それによって、開かれた存在としての子ども、おとなとの関係のなかでの子どもという観点の重要性を確認することができた。

二、子ども＝おとなとの関係の中の存在

《全体的見方の復権――その転機となったもの》

我々が従来の発達研究の無力さを痛感せざるを得ないのは、発達に問題を抱えた一人の子どもに相対したときである。この場合、通常我々は聴診器がわりに何らかの発達検査を行い、まずその子が一次元化された発達尺度のどこに位置づけられるのか、さらには個別機能の下位発達尺度のどこに位置づけられるのかをみようとする。こうして、全体的にどの程度健常児から遅れているのか、機能的プロフィールにどのような偏奇があるのかが調べられる。従来の発達研究の枠組に従って出来るのはここまでである。そしてそこから得られたものがその子の理解と療育に決定的な意味をもつことは、一般的にはまずない。こうして、発達障害の臨床に携わる者はそれから先は手さぐりで進んでいかねばならない。「これから先は発達障害の臨床に携わる者の問題であって、発達心理学者の問題ではない」こう開き直れる研究者たちはそれでよいのかもしれない。しかし、目の前にいる障害を抱えた一人の子どもを発達心理学の側から理解しようとするとき、我々は「個体のもつ機能」という分析的見方だけではもはや一歩も進めないことを認めざるをえない。そして翻って考えれば、我々発達研究者の多くは、子どもを生きた現実の姿において全体的に捉えるという方向性を必ずしももってこなかったことに気付く。実際、生きた子どもを特定の課題状況に特定の機能をもって臨む個体に還元し、そうして得たデータの意味を測定した機能次元上においてのみ考えて、ほとんどの場合、それを生きた子どもに再び差し戻して異なる枠組のなかで再考することはないのである。

それはともあれ、与えられた課題状況を前に、黙したまま窓の外をみている一人の子どもを前にしたとき、子どもの発達を研究しているつもりでおりながら、その子について何も語りえない自らの無力を痛感せざるをえない。そしてこれまで述べてきたような機能分析的アプローチが実際には多くのものの捨象の上に成り立つ子どもへの切り込み方の一つにすぎないことも合せて実感される。しかし、前稿で述べたように、この深刻な無力感は自らに現象学が言う意味での「還元」をせまり、従来のアプローチにおいて暗黙のうちに前提されていた能力主義的な子ども観や発達観を浮かびあがらせる結果にもなった。[註15] そして、最初は意図的というより必要にせまられたかたちで、子どもの成長の場のなかにその子を位置づけ、それを総体として捉える視座が開示されてきた。つまり我々は、「できる―できない」という枠組や「完態への定向進化」という発達観を括弧に入れ、目の前の一人の子どもの生きた姿を、人とのかかわり、物とのかかわりを通して、それも具体的な行動ばかりでなく、子ども―おとなの欲望の場、幻想の場の理解を含めて、全体的に捉えていかざるをえなくなった。[註16] そして、この作業を進めていくなかで、従来の発達研究がその枠組のゆえに看過してきたいくつかの重要な点が浮かびあがってきたのである。

このような全体的な見方において、子ども理解の一つの軸になるのが母子関係であることはいうまでもない。初期の母子関係研究、親子関係研究は、従来の機能分析的な枠組のなかでも取りあげられてきたはずである。そこでまず、それらの研究の問題点をふりかえってみておくことにしよう。

《従来の親子関係研究、母子関係研究の問題点》

従来の親子関係、母子関係に関する研究は一言でいえば相関関係の

研究であったといえる。たとえば、独立変数として親の養育態度のタイプをとりあげ、従属変数として子どもの性格のタイプをとりあげて、どのような養育態度がどのような子どもの性格と相関するかを調べ、得られた相関値から養育態度と子どもの性格との因果的な結びつきを推論するのである。授乳パターンと子どもの依存度、親の性格と子どもの不安度、親の養育態度と子どもの達成動機の高さ、等々、親の養育態度と子どもの性格との関係についての相関研究は、そのいくつかの次元について数多くの研究を生みだしてきた。そして、統計的には有意になるがそれほど高くない相関値をもって、あるタイプの養育態度と子どものあるタイプの性格とのあいだに因果的なつながりがあるというような結論が導かれてきた。しかし、得られた結果や結論は必ずしも一義的ではなかった。その理由を考えていくなかで、養育態度尺度によって測られる親の態度そのものよりも、子どもによって認知された親の態度と子どもの性格とのあいだに比較的高い相関があることを示す研究も出てきた。この事実には、親子の力動的な関係にせまる一面があると思うが、そこから先の展開は相関研究からはなされていないようである。いずれにしてもこうした相関研究は、一方では親の特性を別個に洗い出し、他方では子どもの特性をこれまた別個に洗い出すというように、親子の力動的な関係を分断しているために、特定の親の働きかけがどのようにして子どもの性格につながっていくのかは一向に明らかにならない。

これは、「言語発達に及ぼす親の働きかけの影響」といったテーマの研究においても同様であった。一方では母親の言語的な働きかけを量的に測定していくつかの群に分け、他方では子どもの言語発達の進度を何らかの尺度を用いていくつかの群に別ける。こうして、言語的働きかけの多少が子どもの言語発達を促進するか否かが語られてきたのである。このような枠組では、とりあげられる母親の言語的働きかけが単位時間あたりの発話量となったのは当然のなりゆきであっただろう。しかしこの種の研究は一般に発話量の多い母親の子どもの言語発達がやや早いという程度の、それも必ずしも一義的でない結論しか導いていない。実際、発話量の少い母親の子どもでも十分な言語発達をとげていくのである。言語発達の規定因は決して母親の言語的働きかけに限られるわけではないのだから、これは当然の結果といわねばならない。

このような親子関係研究をふりかえってみると、分析的視点の限界がよくわかる。親の養育態度と子どもの不安度や達成動機の高さとの関係、あるいは親の言語的働きかけと言語発達の進度との関係を問題にしておりながら、実際にとり出されるのは分断された側面のみであって、関係はもっぱら推論されるにすぎない。つまり、養育態度がどのように言語発達を促進するのかはこの種の研究では具体的にとりあげられていない。実は相関研究では「どのように」を具体的に捉えることは不可能なのである。なぜなら、そこには親―子の具体的な姿がどこにもなく、あるのは分断された親の特性と、これまた分断された子どもの特性だけだからである。いいかえれば、我々は生きた親―子の関係そのものに立ち合わなければ、その関係にこれ以上せまることができない。これはグループデータ中心の研究から個々の事例的研究に中心を移していかねばならないことを示唆している。

《最近の母子関係研究とその限界》

このような従来の親子関係の研究動向に対し、最近になって親子の関係そのものを取りあげようという動きが少しずつみられるようになってきた。この種の動きがでてきたのは予想通り個々の事例的研究からである。まず一つの流れとして、心的な問題を抱えたために発達に偏奇が生じたと思われる子どもたちについての、発達臨床研究がある。たとえば、子どもが現にいま呈している臨床像を、いずれかの時点で発生した母子関係の偏奇の累積された姿とみるとき、子どもと母親との具体的なやりとりがどういうものかまず明らかにされねばならない。こうしてまず、適当な母子の接触の場を設定してお互いの働きかけあいを観察してみれば、子どもの出すサインを母親が読みとって適確に応答しているか、子どもの問いかけに答えているかといった狭義における関係そのものが具体的な行動レベルにおいて明らかになる。このようにして最近の発達臨床研究は母子間の交流（コミュニケーション）を行動的単位とみるような視点を確立してきたのである。[註17]

もう一つの流れは、一九六〇年代より盛んになった早期乳児期研究の一環としての、早期母子関係研究である。個々の研究の関心そのものは、愛着行動の発達にあったり社会性の発達にあったり、母子融合性にあったりして、それぞれ異なる文脈から発しているが、いずれも母子間の具体的なやりとりの関係そのものを取りあげている点では共通している。なかでもトレヴァルセン（1975）[註18]による母子間の行動的同期性（syncrony）に関する研究は興味深い。さらに彼は最近（1978）[註19]乳児の喃語や発話に対して母親がどのように赤ちゃん言葉でもって応じるか、母親の赤ちゃん言葉がどのように乳児から喃語や発話をひきだすかを調べている。日本でも三宅およびその協同研究者たち（1974）[註20]は、従来の親子関係研究の不備を正しく批判して関係そのものを捉える必要をとき、母子間の言語的コミュニケーション連鎖を行動単位としてとりあげることによって、例えば子どもの言語発達の進度が母親の発話量と関係するよりも、むしろ母親の発話の質、つまりコミュニケーション連鎖の維持につながるような応答の仕方や応答の質と関係することを明らかにしている。

このように、一方では発達臨床研究から、他方では早期母子関係研究から、母子間の関係そのものについていくつかのデータがえられるようになってきている。これらは、関係を分断しておいて相関値から関係を推論していく従来のような研究にくらべれば、確かに大きな前進である。そしてこれらの研究は母子間の関係そのものが、これまで機能の発達と理解されていたものの背景、地として、当の機能の出現や発達を支えていたことをも明らかにした。たとえば、乳児の喃語はもはやおとなの発する語音への同化、自ら発した音のフィードバックによる調音訓練といった機能に還元されえない。これまでは、調音練習によって母国語の音素に同化していくことが初語の出現までの喃語の意味と考えられ、またその限りにおいてしか後続の言語発達とは関わりをもたないと考えられてきた。ところが、喃語へのおとなの「赤ちゃん言葉」による誘いかけに対する乳児の応答という関係そのものを捉えてみると、そこには言葉が登場してくるための基盤をつくる働きがみとめられる。つまり、「誘いかける——応答する」という構造が築かれ、しかもそのことが乳児にも母親にも楽しいこととして受けとめられて、感情的なつながりがで

きていくのである。これこそ、ウェルナーのいう原初的母体（primordial matrix）[註21]の内容であろう。たしかに産出された語音としての喃語そのものは後の言語発達に機能的なつながりをもたないかもしれない。しかし、喃語をエルゴン（産出されたもの）としてではなく、エネルゲイア（活動）としてみ、しかもそれを母子関係の中に位置づけてみれば、そこには言語的コミュニケーション構造の雛型をみとめることができる。[註22]このように、母子間の関係そのものの解明によって、これまでの機能的観点では時間プログラムに従ったものとみえた行動の出現が、実際にはそのような関係を背景として浮かびあがったものだということがわかるのである。

しかしながら、こうした諸研究を評価しながらも、それらが「関係」という概念をきわめて狭くとらえ、それを具体的な行動レベルでしか考えようとしていない点を批判していかなければならない。

まず、心的な問題を抱えた子どもを母子関係障害という枠組のもとに理解しようというとき、問題になるのがまずもって具体的行動レベルでの関係そのものの偏奇だというのは理解できる。たとえば、言葉がいくつか出だした頃の乳児の発話に対して通常の母親は短い赤ちゃん言葉でもって合づちをうったり、あるいは乳児の発話を模倣したりする。あるいはまた母親が独り言をいうふうにして話しかけては自ら答えたりもする。そこには喃語期の終り頃の、先にも述べた「誘う―応える」の構造がみられる。さて、先の心的な問題を抱えた子どもと母親の関係のあいだにそのような構造はなかったとしよう。つまり、母親の応答のテンポがずれたり、応答があっても長い文章によるおとな言葉であったり、要するに「絡みあい」というものがなかったとしよう。この場合、行動レベルでの関係そのものに通常からの偏奇がみとめられる。しかし、そのこと自体が言葉の遅れ、自律行動の遅れといったこの子の臨床像の原因であると直ちに言うことはできない。言いかえれば、この時点では「関係の偏奇」はまだ意味の決定をうけていない。子どもをひきこもらせていったもの、母親にその子との関係を難しいと感じさせているものは、おそらくその「絡みあいのなさ」そのものではあるまい。むしろそれは、二人のあいだの「症状」、二人でつくりあげた「症状」である可能性が大きい。そのような行動レベルでの偏奇は子どもの症状を説明するものではなく、二人のあいだの関係のゆがみを証言するものであり、したがって説明されるべきものなのである。

ところが、発達臨床研究の多くは、偏奇した関係行動の抽出で自足し、それを子どもの症状の原因系とみなすために、その偏奇した関係行動を除去すれば症状もまたなくなると考えがちである。そのような観点から、治療的援助が偏奇した行動の除去にのみ向かうというようなことが起ってくる。しかしながら、子どもの置かれる関係の場は、母子関係が中核的位置を占めるとしても、それが全てなのではない。まずもって家族内の力動的関係が、そしてその力動的関係を貫く文化（社会的慣習や常識）がその子の生活世界を構成している。そして母子の関係は具体的な行動レベルの関係ばかりでなく、互いの欲望がぶつかりあう幻想的関係でもある。そのような諸々のものがその母子関係を重層的に規定している以上、子どもの理解はその母子関係の偏奇の理解にとどまらず、その子をとりまく状況（行動的関係、幻想的関係、文化社会的関係）の理解へとひろがっていかねばならない。言葉

に遅れをもち、対人的関係に問題を抱える子どもを「自閉症」と命名したとき、かつてそれは「降って湧いた不幸」と母親には納得される一面があった。けれども今日、子どもの自閉を母子関係障害と考える世間一般の風潮の中では、同じ診断名が母親を絶望の淵に突き落とす結果になる。なぜなら、その診断名は「母親に責任のある障害」を意味するからである。こうして、わずか三文字の診断名は母親を絶望させ、そのことが、さもなければそれほどひどくはならなかったはずの母子関係をひどくゆがめる結果になる。つまり母子の関係の障害は、母親の心理を貫く社会通念によって規定されている部分があるわけである。夫婦間の破局、母親の過剰な期待や欲望、「掟」としての父親の不在、等々、家族内力動に含まれるゆがみがどのように母子関係を貫いているかについては今さら言うまでもないだろう。

そうしてみると、我々はまず「偏奇した関係行動」に注目する一方、それを一つの症状とみて、そこに「圧縮」されている子どもとおとなの関係性の総体を一つずつ解きほぐす作業にとりくまねばならないことがわかる。要するに「関係」という概念を具体的直接的関係に限局してはならないということである。さもなければ、従来の母子関係研究の轍を踏むことになってしまうだろう。

同じような批判は、先の三宅等の研究にもいえる。たしかに、発話量は少いけれども子どもの発話を支えてコミュニケーション・ユニットの巾を大きくしているT児の母親と、発話量は多いが子どもの発話との絡みあいが少いためにコミュニケーション・ユニットの幅の狭いE児の母親との対比は、母子間のコミュニケーション・パターンの分析として興味深いものである。けれども、そのようなコミュニケーション・パターンが言語発達を直接規定したり促進したりする要因かどうかは大いに疑問である。もちろん、喃語期のころからそのような二種のコミュニケーション・パターンが累積されていけば、二人の子どものあいだに言語発達の違いがでてくるという予想はできる。しかしその違いは決定的なものであろうか。つまり、特にE児とその母親のコミュニケーション・パターンは言語発達を阻害するとみてよいのだろうか。たしかに、E児はT児よりもある言語発達尺度において相対的に低い値をとった。けれども、実際には支障のない言語発達を遂げているらしいのである。そうしてみると、このデータを、T児の母親のコミュニケーション・パターンは言語発達を促進し、E児の母親のコミュニケーション・パターンはこれを阻害するとみるべきなのか、それとも母親と子どものあいだのコミュニケーション・パターンにはいろいろなタイプがあるが、それにもかかわらず、大過なく言語発達はなされていくとみるべきなのか。これについては、議論が別かれることになろう。このような議論になるのは、彼らが言語発達のレベルと母子間のコミュニケーション・パターンの結びつきを直接的なものとみているためである。ここで言語発達のレベルを子どもの「症状」に、そしてコミュニケーション・パターンを母子間の関係行動の偏奇におきなおしてみれば、発達障害研究に関して述べてきたことがそのままここに当てはまることがわかるだろう。

子どもをおとなとの関係の中で捉えていこうという我々のパースペクティブにおいて、関係という概念は決して母子間の具体的な関係行動にのみ限局されるものではない。そして、関係行動の意味はその行動自身に内在するものではなく、もっと大きな関係枠のなかに位置づ

けられてはじめて読解しうるものである。[註23] その点を忘れれば、母子の関係性をその具体的な相においてとりだすかたちで得られたデータは、その意味の大半を失って、従来の母子関係研究と大差ないものになってしまうことだろう。

《事象そのものへ》

これまでみてきた母子関係に関する諸研究の批判から明らかになるのは、何よりもまず、子どもの生きた生活世界に立ち帰って、一方では子どもの心的現実を、他方ではその子をとりまくおとなの心的現実、およびそれを暗黙のかたちで支え貫いている社会文化的なものを読み取っていく作業が必要だということである。具体的な行動レベルで得たデータは、そのような読解の作業のなかに位置づけられてはじめて、意味を与えられ、再び生気を帯びるのである。こうした作業を一口でいうなら、現象学のスローガンそのままに、「事象そのものへ」「子どもの生活世界そのものへ」ということになろう。

それにしても、子どもの心的現実の読解などというと、ただちに「主観的」という非難が聞こえそうである。しかし、これまで繰り返し述べてきたように、行動的データにしても、それ自体閉じた意味を持つわけでなく、何らかの文脈に位置づけられてはじめて意味をもつものである。行動主義の立場がどのように言おうと、事実として取りあげられたまさにそのことが、すでに研究者によって価値づけられ読解されたものなのである。心的現実の読解が本源的に禁じられているものなら、そもそもはじめから心理学の成立する余地はない。ともあれ、我々は、人と人とが感応しあう場面では、一方は他方の志向を感じとることができるというところから出発しよう。

子どもの生活世界に立ち帰ってみると、そこにはいろいろな問題、つまり「事象」がある。ところがその問題なり事象なりは、周囲にいるおとながとりあげ価値づけてはじめて浮かびあがるものである。つまり、おとなが肯定的に価値づけてそれをさらに高めようとしたり（たとえば先の喃語やかたことへの親の応答）、あるいは否定的に価値づけて抑えこもうとしたりする（たとえば子どもの嘘）。子ども自らが問題性を告知することはなく、それはおとなの目を通して取りあげられたものなのである。ここで一例として、子どもの嘘をとりあげてみよう。

子どもの嘘といってもタイプはさまざまである。子ども同志の会話のなかでは、でたらめなデッチあげの話は日常茶飯である。「今年の夏ネ、うちはみんなで新幹線にのってポートピアへ行くの」「あたしんちはネ、飛行機にのって東京に行くの」。前者の話は本当であり、後者の話は前者によってそそのかされた作り話である。真実ではないという点では嘘であるが、この種の子どもの嘘に介入して叱る親はめったにいない。しかもこの場合、後者の子どもは意図的に嘘を言ったというのではない。幼い子どもの心性においては「こうあればいいな」は「こうある」こととそれほど鋭く区別されていない。とりわけ、願望や期待が色濃くその場を包んでいる時にはその傾向はいっそう強い。さらに、二人のあいだに強い感応が生じたとき（喧嘩で興奮したり、深く相手の気持に同一化したとき）には、自他の区別も明確でなくなる。また、思考があってのちに行為があるというより、行為があって思考がそれに続くという傾向もある。そしてこのような子どもの心性

にあっては、真実と嘘、現実と非現実は明確な区別をえていない。ウェルナーによって複合的（complex）と、ワロンによって混沌的（syncretic）と記述された子どもの心性とはそういったものである。こうして、誘われなかったのに友達の誕生日に出掛けていったあとで、「だって、来ていいよって○○ちゃんが言ったもの」という嘘が出てくることになる。プレゼントを持たせないままに友達の誕生日に行かせた母親はもはやだまってはおれない。飛行機の話しでは許せても、誕生日ではそうはいかないというわけである。このように、子どもの発言や行為は親が嘘としてとりあげなければ日常の営みの中に埋没していくだけだけれども、いったん親がそれを価値づけて取りあげると「問題」になる。これが子どもの嘘の一つの意味である。しかしもちろんそれだけにはとどまらない。親の側には「子どもの嘘」を必要以上に重くみざるをえないような社会的な強い方向づけがある。善悪判断のような道徳意識を植えつけることが、親の本来的な役目だと親自身に思わせるようなかたちで、社会通念が親の態度を貫いている。嘘を叱る親は、自らも気付かないかたちで社会的掟を子どもに伝えているのである。しかし、親の介入によって「嘘」として取りあげられ、また「掟の提示」というかたちで親に介入されてはじめて、子どもは嘘と真実、非現実と現実の距離を疎隔化していくのだというのも真実だろう。したがって、嘘の個体発生的展開は、一方では現実と非現実・空想との分化という、子どもの心性の発達と無関係ではない。他方、子どもの嘘は子どもの自我機能の明確化、複雑化という軸のうえにも位置づけられる。こうしたいと思う自らの強い欲求を、禁止と制止の網をはりめぐらす親との関係のなかで許されるかたちのものに変えていくのが自我の役割だとしても、それがいつもうまくいくとは限らない。しかもその欲求が親の面前で自らの自尊心を保ちたいということである場合には、不都合を隠蔽しつつ自らを守るというふうにして時に嘘がでてくる。あるいはまた、親の前である事柄を事実どうりに告げれば目の前の友人がつらい立場になるというような場合にも、真実をつげないで友人を守るための嘘がでてくる。このように、自我が発達するにつれて、自尊心を守ろうとか、友人をかばおうとかいった複雑な心の働きが生じてくる。このようにみてくれば嘘は自我の発達を告げる一つの指標でもある。実際、どんな場合にも嘘をつけない子というのは、親のある価値感からすればこれほど望ましいことはないようにみえるだろうが、ほんとうは薄っぺらな人格の持ち主にすぎないことが多いのである。このままでは叱られることが見通され、それでも自らの尊厳を守りたいとき――たとえば、テストでいつになくみじめな点数をとったとき、「今日試験がなかったよ」という子どもの嘘は、「親の期待を満たせなかった、きっと手厳しく叱られるだろう」という子どもの思いの中から搾り出されてきたものである。親の側はといえば、かつては子どもだったにもかかわらず、いつの間にか親になり「権威者」になって、もっぱら親として子どもを問いつめていく。問いつめられた子どもは自我が強固になった分だけ抵抗する。そして親の圧力を自我の力では支えきれなくなったとき、涙と共に「真実」を語らねばならなくなるのである。そうしてみると、この場合の嘘は、純粋に子どもの内部から出てきたというより、親との関係、つまり叱られるという関係の中で出てきていることがわかる。親の側の言い分は「嘘をついたから叱る」のだが、子どもの側の言い分は「叱られる

から嘘をつく」のである。

それにしても、なぜ親はこうも子どもの嘘に厳しいのだろうか。自分の子ども時代をふりかえってみれば、誰もが一つや二つきわどい嘘をついた経験をもっているものだし、その嘘もそれほど悪意に満ちたものではなかったという想いもうっすらと記憶に残っているであろうのに、なぜ自分の子どもの嘘は許せないのだろうか。子どもの言ったことをてっきり本当のことと信じていたのに、実は嘘であったとわかったとき、親はもはや看過すわけにはいかない。精神発達の一つの姿として認め、叱る自分との関係のなかで嘘が出てくるのだと納得していても、なにかしら理不尽な激しい怒りがこみあげてくる。それはちょうど、嘘つきな人間がことさらに他人の嘘をあばきたてるのに似た精神の働きなのかもしれない。自分でも意識しているわけではないが、純真な子ども、穢れなき子どもという社会通念としての美しいイメージが子どもに投影されていて、そのイメージが崩れた分だけ怒りになっているのかもしれない。あるいは、実社会に生きる自分が、他人の前で本音とたてまえ、真実と作り事とを巧みに使いわけていることと、今の子どもの嘘とが重なりあって、子どもに腹を立てながら自分にも腹を立てているのかもしれない。いずれにしても、子どもの嘘を前にしての親の怒りは、その嘘が支払わなければならない当然の科料よりも常に大きすぎるという理不尽な面がある。おとなの世界でも、現実と非現実、真実と虚偽がそれほどキッパリと二分されているわけではない。冗談の世界、ウイットの世界があって、無味乾燥な二分法の世界に潤いを与えているのである。しかしその反面、閻魔大王をはじめ舌切り雀などの噺話しやイソップ童話にみられるように、社会全体が文化を通して子どもに嘘を禁じてきたというのも事実であろう。

このように、子どもの嘘を子どもの生活世界の中に置きなおして少し反省を加えてみるだけで、子どもの精神発達という軸が、また子どもの自我発達という軸が浮かびあがるし、また子どもの言い分というかたちで子どもが親をみるパースペクティブが、逆に親の言い分として親が子をみるパースペクティブが開け、それぞれの心的現実が重層的にとりだされてくる。そしてさらに、子どもの嘘がその子の文化社会のなかでどう位置づけられているかも浮き彫りになってこよう。要するに子どもの嘘という一つの事象は、そこから無数の方向に糸がはりめぐらされているのであり、これを逆にみれば、そのような糸の結節点として、子どもの嘘はそれらの糸によって多元的な決定を受けていることがわかる。そしてそれらの糸を一つ一つ解きほぐすなかで、その都度あらわれてくるその結節点の意味が、一方では子どもの心的現実を、他方ではおとなである自分の存在を照らし出す。我々の課題はこのような多元的な事象の意味に立ち合うことだと言えるだろう。我々は子どもの世界へのこのような接近の仕方に対して、発達―現象学的アプローチという名称を与えたいと思う。

《発達―現象学的アプローチ素描》

すでにこれまでの批判的検討から、我々は発達―現象学的アプローチの輪郭を「ネガ」の形で述べてきたことになるが、要点をいくつか整理しながら「ポジ」のかたちで素描してみることにしよう。

㈠　個体発達過程＝生活世界の再体制化過程

我々は、従来の発達心理学が暗黙のかたちであるいは自明なものと

して完態を想定し、それに向かっての定向進化を発達とみなすことについて、いくつかの疑問を提示してきた。子どもがおとなになるまでの過程、機能的完成の過程という見方がその中核をなすことはすでにみた通りである。このような機能中心の考え方が結局は子どもの生活世界を見えないものにしてしまったことを踏まえ、我々は個体の生活世界を中心にすえ、誕生から死に至るまでの過程を個体の生活世界が内的外的要因の影響のもとに再体制化されていく過程として捉えていこうと思う。これは結果的には幾人かの研究者によって提唱されている生涯発達心理学やその基になったフロイトやエリクソンの自我発達心理学と重なる点が多い。それとの異同の検討は次稿にまつことにして、我々が基軸にすえるのは、個体の生活世界、それも子ども―おとな関係を中心とした関係性の再体制化過程であることを確認しておきたい。

我々が発達をこのようにみることになった理由は次のことにある。つまり、かつては子どもであった我々がいつのまにかおとなになり、子どもを育てる側にまわっているという事実である。我々は、かつて子どもとしておとなの圧力に抗したり、あるいはおとなの愛に支えられながら、自らいくつかの選択肢を選びとり自己を形成してきた。このような子どもから「おとな」への前進は、少くとも今日の日本文化を生きる個体にあっては、諸々の機能的完成をもって終点に達したとはいえない。成人式を迎え、結婚し、子どもを得ても、個体として未完であるという思いは残る。子どもの頃、彼岸として捉えていた「おとな」というもの、つまり「完成された存在」というものに、今日の自分が到達しているとはどうしても考えられないのである。子どもの頃彼岸であった「おとな」が今もって彼岸でありつづける一方で、社会的には「おとな」になり、親になって、子どもから親とみられる存在になっている。つまり発達途上にある者が、自らの内面においてはその過程がいまだ連続して進行していると思われるにもかかわらず、あるとき突然やみくもに子育ての側にまわってしまうのである。発達研究者として個体の発達過程を上空飛翔的にみれば、二十才前後に完成態をイメージすることができるかもしれない。しかし、青年期後期、成人前期を、文字通り疾風怒涛の時期として苦しみ迷いながら乗越えてきた者にとって、個体発生過程を成人前期をもって完成に達する過程とみることは難しい。発達途上にあると思っていた者が、ある時から子育てという新たな「発達課題」[註24]を抱え込み、そのことによってそれまでの世界を再体制化していかねばならないのである。そういうわけで第一子は未熟な親と出会わざるをえない。個体の乳児期は、別の個体が親として育つ時期と必然的に重なりあうわけである。親が喜びとともに不安をもって育児に臨まねばならないのは、発達途上にある自らが突然子育ての側に転換するという構造そのものに規定されているのである。個体発生の初期が親子のそのような構造的関係のなかで進行していかざるをえないところに、心的発達障害の根の一つがあるというふうにもいえるだろう。要するに子どもが個体として成長する場は、親と子のかかわりあいの場であり、それが子どもの生活世界なのである。

我々が個体の発達過程を個体の生活世界の再体制化と考えていかねばと考えたのは、一つには以上のような理由からである。その他、完態を措定しないことによって、パースペクティブが生涯にまでわたる

等々、他にも数多くの理由があるが、この点に関しての詳しい考察は次稿以降にまわすことにしたい。

(二) 個体の生活世界を貫くもの

従来の発達心理学が子どもを機能、能力の集合体とみてその発生過程を明らかにしようとしてきたのに対して、我々は子どもの生活世界に狙いを定める。子どもの生活世界を貫く要因は大雑把にいって三つある。この三つは本質的に絡み合っているが、便宜的に分離してとりだすと次のようになる。

1° 個体的要因

身体的生理的にどれほど成熟しているか、その子がどういう機能的体制をもっているか、あるいはどういうことができるか、要するにこれまでの機能主義的発達心理学が解明しようとしてきたもの（行動レベル）、また子どもがどのような欲望を抱き、また葛藤をかかえているか（幻想レベル）

2° 家族内力動要因

子どもが親からどのような働きかけを受けているか（行動レベル）、両親が子どもにどのような期待をよせ、また自らどのような願望や欲望をかかえているか（幻想レベル）、弟妹の誕生等によってその力動関係にどのような変化が生じるか（行動レベル、幻想レベル）[註25]

3° 社会・文化的要因

その文化の躾、慣習、儀式等々を通して共同幻想（社会通念）がどのような子ども観、おとな像をもっているか、共同幻想はどのようにして親の内面を支配するか。

例えば、先に排泄の習慣行動に関して述べたように、3°は親の躾を方向づけるかたちで働く。親はこのような社会通念を社会的なものとは意識せずに自らの躾として子どもにふりむけるが、それにとどまらず、そこには親自身の諸々の願望や期待が入り込む(2°)。そのような親の幻想を伴った躾の働きかけとその子の個体的要因(1°)とが絡みあったかたちで、排泄の躾という事象を前にしたときの子どもの生活世界が成り立っているのである。このように三つの要因は絡みあっているから、どれか一つの要因が変化しても子どもの生活世界は変化する。たった一つの運動行動が可能になったことが、まず子どもに大きな自信をうえつけ、そのことが家族内の力動関係にはねかえるというかたちで、親―子関係が一変するというようなことも十分ありうるだろう。また、紐落しのような儀式（社会的慣習）が単なる儀式にとどまらず、親の子どもへの働きかけの体制を変化させ、子どもの体制もそれに応じて変化していくならば、一つの儀式もまた、子どもの生活世界を大きく変える場合があることになる。[註26] このように、子どもの生活世界は三つの要因が絡みあって全体として一つの体制をなしているが、ある事柄を契機として再体制化されていくのが発達の過程であると考える。その際、非連続点をどこにとるかは先にも述べたように今後の我々の研究課題であるが、個体の生活世界をこのような観点から見ていけば、心的障害をかかえた子どもの問題や青年期の個体の心理の問題など、これまでの発達心理学の枠組では十分に捉えきれなかった多くの問題が捉えられるようになるだろう。

(三) 個別分析的見方に対する有機―全体論的見方

本稿の始めの方で我々はウェルナーの発達心理学の概念をかいつま

んで紹介した。すなわち「完態への定向進化」という見方と、機能中心的な見方の二つである。そして我々はこの二つの見方がその後実証的な機能分析的見方によって受け継がれ、行動出現の順序性の解明、機能的連関性の解明という方向に展開をみたと述べてきた。しかしながら、ウェルナー自身はその二つの見方を実証的な機能分析的見方によって展開をはかろうとしたわけではない。むしろ分析的見方を排し、有機―全体論的見方を提唱して、彼自身はグローバルで未分化な心性の記述をおし進めていったのである。彼の有機―全体論的見方は、当時の実証的分析的なデータ中心の考え方の中ではあまりかえりみられなかったが、子どもを生きた現実の姿において捉えるという我々の立場からみれば、今日なお有効な視点である。

この見方は、何よりもまず、特定の個別機能の発現が常に有機体全体の活動によって支えられていることを言うものである。言いかえれば、特定の機能としてとりあげられるものは、常に有機体全体の活動を背景として浮き出た図と理解されなければならない。そこにはさらに、次のような考えが内包されている。すなわち、機能が分化していくとき、以前の機能の未分化な状態（低いレベルの心性）は捨て去られるのではなく、下層に保持され、その上に機能分化した状態（高いレベルの心性）が積み重ねられていくという考えである。一見別個のもののようにみえる機能は、発達の前段階では未分化で複合しており、しかもその未分化な状態は現在もなお、個体の心性の下層部にあって、今の機能の発現を支えている。いわば、過去から現在への横の時間の流れのもとに形づくられたものが、時間切片のなかに縦に配列されていて、ある時間切片において発現するというのである。こうして、今その個体において取りあげられる機能は、その有機体のいまの心的活動全体を背景とした図であると共に、個体発生過程で未分化なものが分化するに至ったその道程を、今この瞬間の時間切片のなかで具現したものでもあるということになる。つまり、ジャクソン・ヘット等にみられるのと同様の層理論を、ウェルナーもまた自分の理論体系の中に組み込んでいるということである。

こういう観点が、正常から異常（病理的状態）への転化、異常から正常への回復といった正常⇄異常の往還運動を理解する上に重要であることはいうまでもない。しかしそれにとどまらず、正常な状態にあっても心的ストレス下におかれた場合などには、やはり未分化な状態への回帰がみられるのである。そのような機能発現の在り様を捉えるうえにも、この有機―全体論的見方は重要な意味をもっている。たとえば、我々おとなにおいては認知機能と情意機能は分化しており、互いに別個のものと普通は考えることができる。したがって普通は純粋な認知機能をそれだけ取り出すことも不可能ではない。しかし、強烈な感情がその人の心性を支配した場合には、もはや分化し分節した認知機能については語れなくなる。もとより子どもの場合にはその傾向は一段と強い。ある子どもは、特定の機能を有していないからその課題に応じられないのではなく、ストレス下におかれているがためにその機能の発現が抑え込まれ、低次の心性レベルでしか対処できなくなっている――こういうケースはしばしば認めることができよう。これは、課題との関係で、「できる―できない」だけを分析し、そこからこの機能を「持つ―持たない」と考えていく分析的な見方の限界を越える見方であると思う。特に幼児期の心性を捉えようとするときに、

機能的複合性、たとえば認知機能と情意機能との、運動機能と情意機能との未分化性が、実際にどういう形態をとってあらわれてくるのかを記述のレベルで明らかにしていくことがこれから必要である。それが子どもの生活世界に接近する一つのルートであろう。そしてもちろん、子どもの生活世界を理解するために個別の機能をとりあげる必要がいろいろな場面ででてくる。その時、その機能の発現を有機―全体論的な枠組のもとに捉えなおす必要があることはいうまでもない。

㈣　現象学的反省――研究者自身への逆照射

我々はみな、子どもがすこやかに育つことを願い、望ましい方向へと成長を遂げていってくれることを願う。誰しも子どもの未来にいろいろな不幸が横たわっているとは考えたくない。しかしながら、発達とは本質的に逆説を含んだ過程である。知性が向上し、それによって世界が拡がり、自由度が増せば増すほど、葛藤が増えしたがって適応は難しくなって、自我機能を強固なものにしていかざるをえない。子どもの発達は、必然的に葛藤を抱えこまざるをえないのである。したがって、個体発生過程は葛藤の個体史としても読めることになろう。喜びと悲しみ、幸と不幸が背中合わせになっているのが発達の過程なのである。このような生の両義性にもかかわらず、それでもなお我々はよかれと思って子どもを一定の方向に導いていかざるをえない。

ではどこに導いていけばよいのか、何がよりよいこと、価値あることなのか。それが自明でないからには、発達研究は常に反省の契機を含まねばならない。発達心理学は事実学としては自足しえないのである。「発達とは何か」という問いは「人間とは何か」という問いと同根のものであり、従ってある意味では「答えきれない」問いなのだが、だからこそまた我々は、この問いを不断に問い続けていかねばならないのである。

我々の前に立つ子どもは、その存在をもって「発達とは何か」という問いを我々につきつける。一体自分はどこに向うのか、と。ウィニコット流に言えば、子どもとは自らの運命を探し求めている一人の人間に他ならない。このような子どもの問いかけは、ただちに我々おとなの足許を照らしだす。子どもは未来のおとなであり、我々は子どもの未来の姿だからである。子どもとおとなの間に張りめぐらされた志向の糸は、結局研究者の足許を逆照射して、その研究の枠組自体を問いただすことになる。こうして我々は現象学的反省の契機を自らの学問的営為の本質的な部分として含みこんでいかねばならないのである。[註27]

以上、我々の発達―現象学的アプローチの内容を「ポジ」のかたちで素描してみた。もちろん、このアプローチは端緒についたにすぎず、提示したものは全く荒削りのものでしかない。内容の充実は今後の研究に待たねばならない。しかし、究極の真理を彼岸において「そこに向いつつあるがいまだ未熟」と自己弁護する一方で「行けるところまで行ってみる」と開きなおるつもりはない。真理に向っているのだなどと安易に信じ込まずに、それでもいまこの時点でなしうる反省の作業を可能なかぎり押しすすめ、その結論の一つ一つに責任をとっていかねばならない――こう筆者は考えている。

註ならびに参考文献

1、「おとなから見た子ども」島根大学教育学部記要第十三巻　昭和五十四年

2、Bulletin de psychologie n° 236 tome XVIII 3–6

3、H, Werner. “Comparative Psychology of Mental Development” 1948. 邦訳「発達心理学入門」ミネルヴァ書房一九七六年

4、ウェルナーの発達心理学の全体像をついては前掲訳書に付した筆者の解説『ウェルナーの発達論の展開』を参照されたい。

5、ウェルナー自身は、このような枠組をとりながらも、取りあげられた個々の機能を有機体全体の活動や状態の中に位置づけてみていくという、有機—全体論的見方を堅持していた。これは、これから批判していく機能分析的な今日の発達心理学が看過してきた重要な視点である。この点については本稿一二七頁以下を参照されたい。

6、この点でいえば、ピアジェの心理学は発達心理学というより遡行心理学的色彩が強い。形式論理操作の根は何か——→具体的操作——→その根は何か——→感覚運動的シェマ。こういう遡行を行って、今度はこれを逆にたどり子どもの認知発達を語るわけである。従って、彼の発達心理学が論理的に連続しているのは当然である。しかし、感覚運動的知能から具体操作的知能へ、また具体的操作から形式操作への移行が必然的なものかどうかは問題である。比較文化研究によれば事実はどうやらそうではないらしい。ピアジェが無前提的に完態と置いたものは、一定の文化を生きる者にとっての完態なのである。

7、ピアジェは子どもから得たデータを認識という枠の下でのみとりあげているために、子どもの応答の意味を捉えそこねていることがままある。例えば、子どもをとまどわせるような事象を与えておいて、それを子どもに説明させるような場合である。課題の操作的構造の認識ができていない子どもは当然誤りを犯す。これをピアジェはとりあげて、魔術的段階等々と特徴づけていく。しかし子どもの答えには、答えを強要されている場合に何かを答えざるをえない子どものとまどいや葛藤が含まれているはずである。本当は答えようのない問いかけに無理に答えようとして出てきたのが子どもの答えであるにもかかわらず、それが美事に捨象されているのである。こういうことになるのは、子どもの答えを認知機能の発達という枠組の中に強引に押し込めてしまうからである。

8、T. G. R. Bower, “Human Development” 1979. 彼はこの著の中で後成的過程のみを発達過程とみる立場から、いわゆる生涯発達心理学の構想に反対する意見を述べているが、それは彼が暗黙のうちに機能的完成への過程＝発達という図式を受け入れているからである。

9、ウェルナーはカプランとの共著 “Symbol Formation”（邦訳『シンボルの形成』ミネルヴァ書房）の中で、シンボル（言語）を世界を認識するための道具というふうに捉えている。こうして彼は言語の発達を母子間でしか通用しない多義的な言語から、公共的で一義的な言語に至る道程とみる。そこには言語を媒体として世界をすみずみまで明示的に認識することこそ人間の生の目的だといわんばかりの美しいイメージが重ねられている。けれども、我々人間は、己れの欲望を歪曲したり隠蔽したりするための道具としても言語を用いている。つまり言語発達は世界を明示するためのものばかりではない。にもかかわらず、彼はそういう言語発達の裏面を捨象する結果になった。これは彼の発達観、子ども観があまりにも美しいためである。彼が子どもの情動を認知機能を妨げる要因というネガティブなかたちでしか取りあげないのも、子どもを美しくイメージしすぎているためであると思う。これからもわかるように、どのような発達観、子ども観をもつかは、その人の発達心理学の内容を大きく規定する。

10、ビネー知能検査項目の通過数（行動能）を縦軸に、生活年齢を横軸にとって、各年齢での検査結果をプロットすれば、単調に増大するいわゆる発達曲線が描かれる。これは常識的な発達のイメージと符合する。しかし、ビネー検査は、その課題解決に、出現・消長する多次元的な諸機能を必要とする。従って、検査全体は機能的にみれば非連続性を含んでいる。つまり、いわゆる発達曲線は単調に増大するように人為的に項目を選んだ結果であ

って、それが発達の真の様相を記述しているわけではない。

11、「発達」第二号ミネルヴァ書房　一九八〇年

12、初期経験、臨界期という概念は、比較行動学の影響を端的に物語るものであり、発達障害研究と結びついていくつかの重要な知見を生み出してきた。例えば、脳性マヒ児の早期肢体運動訓練の効果などはその代表例である。しかし、発達段階という概念と同様、初期経験、臨界期という概念の濫用は避けねばならない。というのも、人間は動物と違って、きわめて可塑的だからである。おそらく我々は、比較行動学に類縁関係を求めていく以上に比較文化学（文化人類学）に分け入ってみるべきである。

13、フロイトの肛門期、それに対応するエリクソンの自律性対恥・疑惑という心理・社会的危機などの考えは、排泄の問題を子どもの生活世界に位置づけて考えていこうという我々にとって、興味深い点が多々ある。彼らの自我発達心理学と我々のアプローチとの異同については、今後検討していきたいと考えている。

14、このような見地はバウァーの前掲書の第九章においてかなり詳しく述べられている。

15、現象学的還元が「存在を前にしての驚き」だというのは、まさにこのようなことをいうのだろう。

16、母子関係障害を母親の側の欲望・幻想の問題として促えたものに H. Deutsch, "Psychology of Women" 1945. が、家族内力動の問題として捉えたものに M. Mannoni "L'enfant, sa《maladie》et les autres" 1965.（邦訳『症状と言葉』ミネルヴァ書房）が、乳児の側の欲望・幻想の問題と捉えたものにM. Klein, "Envy and Gratitude" 1957.（邦訳『羨望と感謝』みすず書房）が代表的なものであろう。子どもの生活世界へのアプローチは、このような母子間、家族内の欲望の場、幻想の領野を経由することなくしては、その核心にせまることはできないと筆者は考えている。

17、行動レベルでの母子関係記述の問題点については前稿でも簡単に触れたが、方法論的検討を含めて次稿以下で考察してみたいと思う。

18、C. Trevarthen, Early attempts at speech, In "Child Alive" Lewin, R(ed) 1975.

19、Sylvester-Bradley & C. Trevarthen, Baby talk as an adaptation to the infant's communication. In "The Development of Communication" N. Waterson & C. Snow(ed) 1978.

20、三宅和夫その他　乳児発達研究法の探索2　北大教育学部紀要　第二十三巻　一九七四年

21、H. Wenner, & B. Kaplan, "Symbol Formation" 1963.（邦訳『シンボルの形成』ミネルヴァ書房）第5章参照

22、従来、こうした喃語期の母子関係が言語発達の枠組にとり入れられなかったのは、やはり言語の発達を世界を認識するための道具の発達とみて、指示機能や表示機能を中心に問題を考えてきたからである。註9でも述べたが、ウェルナーは原初的母体の重要性を認めておりながらこのような喃語期の母子間の交流（音声的・感情的）の構造をとりあげなかった。それは彼が言語発達を表示機能を中心にみるあまり、言語が話し手―聞き手の感情交流の場から離脱することが言葉の発達だと考えていったからである。つまり、表示機能の完成という強い枠組のために、喃語期の母子関係が見えないものになってしまったといえるだろう。

23、コミュニケーション・ユニットの長い母子間の相互作用は良好な母子関係を、コミュニケーション・ユニットの短い母子間の相互作用は好しくない母子関係を意味するとは必ずしもいえない。たしかに常識的には直ちにそう考えたくなるところだが、そのような安易な価値づけは、特に臨床場面では危険であろう。また臨床場面ではいわゆる問題行動の消失をもって「終結」を迎えるケースが多いが、それはともかく、母子間の関係性の問題そのものが消失して真の解決をみたと考えるのは安易すぎよう。なお、発達臨床では、治療効果を云々するのは特に難しい。というのも、子どもの側の成長する力、その母子関係が必然的に迎える関係構造の変化（入園、

就学、等）など、子ども及び母子関係に、治療的関係以外の強力な力がどんどん入り込んでくるうえに、いわゆる「対照群」をつくりえないからである。

24、ハヴィガーストの提唱したこの「発達課題」という概念は、初期経験や臨界期などの概念との関わりのなかで、心理学者や教育学者のみならず幼稚園や学校教育場面でも「発達段階」とならんでよく用いられる概念であるらしい。しかしこの概念に十分な検討を加えていけば、おそらく個体の生活世界が、そしてそれを規定する社会、文化の問題が浮かびあがってきたはずであり、したがって、今日の発達心理学の問題が浮かびあがってきたはずである。そしてこれを逆にみれば、発達課題という概念が今日十分な考察を欠いたまま安易に使われている可能性が示唆される。

25、家族内力動の問題は、核家族と複合家族では大きく様相を異にし、したがって子どもの生活世界も相当異っていると思われる。とりわけ、島根県下の複合家族にあっては、昔の「嫁―姑」関係ではないかたちでの、おとなたちのあいだの複綜した欲望のぶつかりあいがあるように思われる。この点については機会をみて論じてみたい。

26、実際、南洋諸島の文化の通過儀礼にみられるように、このような社会的慣習を契機に、一種の死と再生の経験を経て青年が心理的な再体制化をとげるということは十分考えられる。

27、現象学的反省については、前稿ならびに拙稿《現象学と心理学の接点》（「現代思想」フッサール特集号一九七八年）を参照されたい。

（島根大学教育学部心理学研究室）